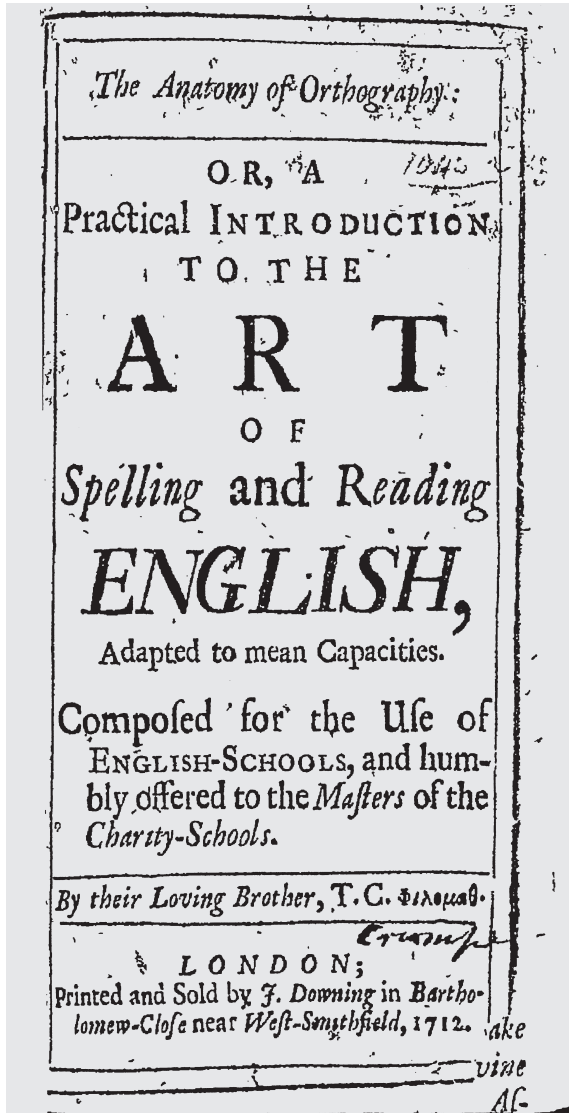


1 音節でも 9 文字の単語は最後に学ぶ  
——トマス・クランプ『正書法の解剖』と 18 世紀初頭のイギリス  
におけるスペリング教育——

鶴見良次

1712 年に刊行されたトマス・クランプの『正書法の解剖』(図 1)<sup>1</sup>は、イギリス国教会系のチャリティ・スクールの運営母体であるキリスト教知識普及協会(以後、SPCK と略記)が学校推薦図書として挙げ、実際に教科書として用いられたスペリング・ブックである。原題に含まれる正書法(orthography)という言葉は、中世のラテン文法以来の古典的な文法部門の名称である。母音、子音、二重母音などのアルファベット、音節と分節、スペリングを扱う。そもそも中世においては、文法の役割は、正しく文字を音節に、音節を単語に、単語を文章に並べ、発音することとされていた。正書法は単語論、統語論、韻律論(作詩法)に先立つ英文法の第 1 部門であった。<sup>2</sup>こうした伝統は 18 世紀の英語教育にも生きており、チャリティ・スクールの若い生徒がまず学ぶのが正書法であった。子供たちは実際にどのようにアルファベットやスペリングの学習を始めたのだろうか。クランプの書は、英語教師によって著され、実際にチャリティ・スクールで用いられたことがわかっているという点で詳しい考察に値するものである。同書では、音節・分節と語の構成についてそれまでのスペリング・ブックには見られない指導が行われており、その意味でも興味深い。すなわち、単語を分節する「分析的」(analytical)なプロセスとしてスペリングを教えるのではなく、音節を組み合わせることで語が成り立つことを理解させる、スペリングの「統合的」(synthetic)な側面を重視した指



(図 1) トマス・クランプ『正書法の解剖』(1712) 扉

導法である。本稿では、同書の紹介と検討をとおして、18世紀初頭の子供たちが文法の第一歩として、スペリングと音節・分節をどのように学んだかについて考察する。

## I

『正書法の解剖』の著者トマス・クランプについてはほとんど知られることがない。献辞のなかに、同書が幼い子供に綴字や音節の指導をした経験に基づいて書かれたものである旨が記されており、世紀転換期の英語教師であったと思われる。同書は、ロンドンのシティにほど近いバーソロミュー・クローズで1670年代から印刷業を営んでいたジョウゼフ・ダウニングによって1712年に出版・販売された。ダウニングは、再洗礼派信徒で政治家のヘンリー・ダンヴァーの『洗礼論』（初版不詳。第2版は1674年刊）の海賊版を出版したことで同業者から訴えられたとの記録も残るが、そのほか『ウェールズに図書館を建設することの提案』なるブロードサイドと呼ばれる民衆向け出版物やディフォーの著作なども出している。一方販売ではもっぱら神学関係の書籍を扱っていた。<sup>3</sup>『正書法の解剖』は初版のみが現存しており、版を重ねたか否か、またどの程度読者を得たかについては不詳である。<sup>4</sup>副題中に「英語学校用に著された、チャリティ・スクールの先生方にお勧めの書」と銘打たれている。出版の翌年にはキリスト教知識普及協会年次報告書中の「チャリティ・スクール推薦図書一覧」<sup>5</sup>に挙げられている。その功あってか、実際にさっそく同書を採用したある学校の記録が残されている。ヴィクター・E・ニューバーグによれば、ロンドン、クリップルゲイトのセント・ジャイルズ校の委員会議事録に次のような記述がある。

1712年9月19日 クランプのスペリング・ブック 50冊を各3.5ペンスにて購入の承認。

1714年5月28日 クランプのスペリング・ブック 25冊、各3.5ペンスにて注文。<sup>6</sup>

セント・ジャイルズ校は SPCK 創設の翌 1699 年 7 月にシティのクリップル・ゲイトに設立された寄付基金立校である。当初 40 人の貧しい男児を無償で受け入れた。<sup>7</sup>興味深いことに、同校はクランプの書の版元のあるバーソロミュー・クロースと目と鼻の先の位置にある。初年の生徒数よりやや多い 50 冊が出版と同時にこの書店で直接購入され、その後も継続して用いられたのであろう。特定の教科書が特定のチャリティ・スクールで一定の期間使用された記録は必ずしも多くない。その意味でも、ニューバーグも言うように、同書は詳しい考察に値するのである。さらにニューバーグはこの学校が同書を購入した動機を、内容の良さというよりむしろその値段にあったと推察している。たしかに全 72 ページの小冊子で、チャリティ・スクールで初めて読み書きを習う子供たちに使わせるのに適した分量と値段の教科書であった。アルファベット、音節・分節などの理解のうえにスペリングを学ばせる類書には、たとえば他稿で紹介したトバイアス・エリスの『英語学校』(1670)、エドワード・コカーの『優秀な教師』(1696)などがすでにあった。<sup>8</sup>それぞれの値段は定かではないが、いずれも聖書からの抜粋や祈祷などのページを含む、より厚手の教科書である。エリスの書が全 202 ページ、コカーの書が 120 ページで、『正書法の解剖』の優に 2、3 倍の厚さがある。値段が手頃ということは、それに見合っ内容が簡明で分量も適当であったということでもあろう。

事実、クランプの書には子供にスペリングをわかりやすく指導するためのはっきりとした方針があった。生徒にとっての学習のしやすさ、教師に

とっての指導のしやすさが教師たちの選書の決め手となったと考えるべきであろう。SPCK による旺盛な学校建設が始められてしばらく後に時機を得て出版された同書には、クランプが教師として複数の教科書を用いて指導をした体験から導き出した望ましいスペリング・ブックについての考えが反映している。主張は明快である。1 音節語から指導を始めることは妥当だとしても、生徒にとって覚えるのが苦痛な長く難しい語は後回しにして、むしろ短く身近な複音節語を先に学ばせるべきであるというものである。献辞で、同書執筆の動機を類書の不備を指摘しながら次のように書いている。

Because other Spelling-Books beginning with long Monosyllables, which are beyond the Capacity of, and too difficult for young Beginners, render the initiatory part of Learning bitter and unpleasant to them, and consequently the Teacher's Business so troublesome to him, that these Books, seeming very obscure, are generally too much neglected. For my own part, I have been always forced to teach the middle, or latter End of Common Spelling-Books, before I could bring Children to a Capacity of learning the long Syllables in the former Part; and I commonly teach the long and difficult Monosyllables last of all.

一見単純で説得的な見解にはどのような独自性があり、また指導法としてどのような有効性があったのだろうか。

## II

『正書法の解剖』は全7章からなる。多くのスペリング・ブックの構成

が最初の短音節の章から音節数順に並べられているのに対し、同書はそれと異なる構成をとっている。第1章は、アルファベット26文字の学習に当てられている。各文字の読みを、たとえばCはcee、Hはachのように示した音声表記の一覧と、ローマン体、イタリック体、ブラック体のそれぞれ大文字と小文字の表が掲げられている。続けて次ページには「子供にも簡単な音節表で文字を知る」として、子音に6つの母音字(a、e、i、o、u、y)を付けたものの一覧がある。次の7ページからが同書に独自の考えに基づいた構成になっている。前ページの子音字+母音字の学習を応用して、「語根語中で2つの母音字に1つの子音字が挟まれる場合は後の母音字に結びつく」という分節の規則が示された後、短音節から、何と6音節までの、比較的日常的でやさしい単語が並べられている。

be | a-do | ma-ny | e-ne-my | no-ta-ry (p.7)

ca-pa-ci-ty | mi-li-ta-ry | li-be-ra-li-ty (p.8)

その後、u-ni-tyやpi-e-tyを例に挙げ、語頭の母音字、あるいは語中で他の母音字の後に続き、後に来る子音字が1つの母音字は1音節を構成するとの注記がある。(上に引用した説明文からもわかるように、一般にスペリング・ブックにおける音節の構成の説明は、母音字を中心として、その前後にどのような子音字や母音字が結びつくかによってなされる。以下、本稿では、そのような文字と文字の接続をあえて簡略化し、+記号で代用して表す。)

第2章は、2文字音節からなる語の章である。第1節で母音字+子音字、あるいは母音2つのユニットが学ばれる。また「1語中に2つの母音字が重なってあるが、二重母音(diphthong)ではない場合は、前の母音字は前の音節に、後の母音字は後の音節に付ける」とする規則に基づいた短音節から

7音節までの語の表が掲げられる。

if | ri-ot | o-ni-on (p. 10)

ex-a-mi-na-ti-on | be-a-ti-fi-ca-ti-on (p. 12)

合わせて、語尾の tion, sion の綴りの音が shon であることが説明されている。続く第2節では、片方が黙字 (mute) となる2子音字は真中で分節するとした後、2音節の al-ly から6音節の ir-re-gu-la-ri-ty などの語を並べた表が掲げられる。

このように第2章からは章数と同じ数の文字からなる音節によって構成される語の勉強が続く。第3章では以下の6つの節で3文字の音節が学ばれる。1. 子音字+母音字+子音字 (cut, bit-ter-ly. 語のリスト中の一部。以下同様)、2. 母音字+子音字+母音字 (黙字) (ace; col-le-gi-ate)、3. 二重母音+子音字 (aid; am-bi-gu-ous-ly)、4. 子音字+二重母音 (bay; qua-li-fi-ca-ti-on)、5. 2子音字+母音字のかたちで、「2つ目の子音字が流音 (liquid) となる」音節として、流音の l, n, w, s, r の説明と例が示される。たとえば、「流音 l は d, k, t, w を除くすべての黙字の後に来る」(例として bla, cla, fla など)、あるいは「g, k, f 以外の黙字は流音 n の前には来ない」(gna, kna など) (26頁)。さらに、bly や子音字+le, cre で終わる語末の音節の一覧が続く。6. 母音字+2子音字 (ald; ulk)、さらに edg のように別々の2つの黙字で終わる音節、1つの黙字で終る音節 (elf)、2重黙字で終わる音節 (off)、子音字で終わり、複数形で s を伴うことのできる音節 (di-als) が示される。

第4章は8つの節で4文字音節が学ばれる。1. 子音字+母音字+子音字+黙字 e (wave; a-bo-mi-nate)。補足説明として、babes のような複数形の名詞や bakes のような三人称単数現在形の動詞では es は音節を作らず、黙

音となること。ただ黙字 e の前に s のある名詞、動詞、あるいは s 音となる c、g、z、x が s と結びつくと音節となることが説明される (face | faces; i-mage | i-ma-ges)。2. 子音字+二重母音+子音字 (laid; ques-ti-on-ed)、および y で終わる名詞の複数形 (la-dies)。3. 2子音字+母音字+子音字 (blan-ket)、および3章5節の3文字からなる音節で、cre、tre、le で終わるすべての動詞の過去形あるいは名詞の複数形 (a-cre-s; pic-kles; wrin-kled)。4. 子音字+母音字+2子音字 (back; ac-cept; love-li-ness)。および二重母音+2子音字 (ails; oils)、ch、sh、ss で終わる名詞あるいは動詞で es を伴って複数形、三人称単数現在形を作るもの (fish | fish-es; fi-nish | fi-nish-es)。5. 2子音字+二重母音 (play; mis-chievous)。6. 母音字+2子音字+母音字 (ache | a-ches; dif-fer-ence | dif-fer-en-ces) 7. 3子音字+母音字 (chro-ni-cles)。8. 母音字+3子音字 (acts; go-ings)、および edst で終わる二人称過去形 (know-edst)。

第5章は5文字からなる音節を10種類に分けて解説している。1. 2子音字+母音字+2子音字 (black; trans-por-ta-ti-on)。2. 2子音字+母音字+子音字+黙字 e (grace; where-in-so-e-ver)。ただし、たとえば blade に s が付くと6文字語となる。3. 2子音字+二重母音+子音字 (chain; un-fruit-ful) 4. 子音字+二重母音+2子音字 (maids; un-learn-ed)。5. 子音字+母音字+3子音字 (backs; up-right-ness)。および複数形の名詞や三人称単数現在形の動詞で s を伴って、5文字音節を形作ることがある (in-fants; pre-sents)。6. 子音字+母音字+2子音字+黙字 e (dance; in-tel-li-gence)、また前に流音のある s は黙字 e を伴って母音を構成する。したがって badge (5文字1音節) に対し、bad-ges (6文字2音節) となる。7. 子音字 c、g、s、v、z の後に黙字 e が付く4文字音節の変形 (cause; re-lieve)。8. gue、que で終わる語 (rogue; catho-lique)。9. 3子音字+母音字+子音字 (split)、あるいは3子音字+二重母音 (de-stroy)。10. 子音字+母音字+



子音字に黙字 *es* が付いた場合 (*bakes*; *me-di-cines*)。

第6章は10種類の6文字音節の説明である。(図2) 1. 2子音字+母音字+3子音字 (*blocks*; *thanks-gi-ving* など)。2. 1の末尾が黙音の *es* であるもの (*blades*; *e-states*)。3. 2子音字+二重母音+2子音字 (*blains*; *re-proach-ed*)。4. 子音字+二重母音+3子音字 (*beasts*; *launch-ed*)。5. 子音字+母音字+4子音字 (*births*; *be-witcht*)、*lv*、*rv*、*th*、*st* の後の黙音 *e* (*calves*; *them-selves*)、5文字音節+複数形語尾の *s* (*e-pi-logues*; *ca-tho-liquies*)。6. 2子音字+母音字+2子音字+黙音 *e* (*bridge*; *o-ver-charge*)。7. 2子音字+二重母音+子音字+黙音 *e* (*bruise*; *in-crease*)。8. 子音字+二重母音+2子音字+黙音 *e* (*course*; *re-nounce*)。9. 3子音字+母音字+2子音字 (*Christ*; *in-struct-ed*)、および末尾が黙音 *e* (*square*; *tran-scribe*)。10. 3子音字+二重母音+子音字 (*school*; *threat-nings*)。

最後の第7章では、数少ない7、8、9文字1音節語が一括で学ばれる。それぞれ表にして示され、*breadth*; *breathes*; *streights* などが見られる。

これら全7章で学ばれる正書法を貫く基本的な考え方はどのようなものなのだろう。先に見た献辞からわかるように、著者が最も意図するのは、音節数の序列にしたがって1音節語から学び始め、たとえば *cou-rage* のような簡単な2音節語のスプリングの成り立ちを理解する以前に、同書では最終ページで学ばれる *strength* のような語を1音節語であるがゆえに早い段階で学ばせることの不都合を正すことであろう。その代わりに、1文字語である冠詞の *a* には触れていないが、音節を構成するまず2文字からなる音節、次に3文字からなる音節、というように、音節の小さいユニットから注目して、徐々に文字数の多い音節を学び、語の構成を理解してゆくという方法がとられる。さらに、たとえば2文字音節からなる語を学ぶ場合、*of* のような最小ユニットの短い語から始めるのは当然として、次第に音節数を増やし、教科書の早い段階で、2文字音節からなる *re-no-va-*

## CHAP. VI. Sect. 1.

*There are Ten Kinds of Syllables of six Letters, exemplified in order, as here followeth.*

The first Kind of Syllables of six Letters, contains a Vowel, with two Consonants before, and three Consonants after it, as in the Words following.

blocks	ghosts	sticks	whelps
blanch	knight	stings	wretch
branch	knocks	stinks	wrongs
bright	palms	storks	af-fright
backs	scorch	thanks	a-thirst
chirks	skirts	thighs	brigh-neis
chips	snatch	thinks	church-es
church	sparks	thirst	crafts-man
churls	stacks	thongs	de-scends
cracks	staks	thuirbs	mer-chants
crumbs	stamps	trench	witch-crafts
crutch	stanch	trumps	af-fright-ed
crinks	stanks	truths	thank-gi-ving
stocks			

## S E C T. 2.

The second Variation changeth these two last Consonants into *es* Mute See the Examples.

backs	knives	knives	stores	writes
brides	knives	spokes	tripes	ap-proves
craves	scapes	stakes	twines	de-claris
cranes	knives	staves	writes	en-graves
grapes	knives	stones	whores	e-states

(図2) 『正書法の解剖』 66頁

ti-on; re-ca-pi-tu-la-ti-on (11、12頁)のような、長く、必ずしも日常的に頻繁に聞いたり見たりすることのない語の構成も、生徒の理解力に応じて学べるようになっていく。

初めてアルファベットやスペリングを学ぶ子供たちにまず理解させるべきは、文字どうしがどのように結びついて音節を構成し、それらの音節がどのように語を形づくっているかである。クランプの学習法は、語を見て、アルファベットの組み合わせに注目し、文字数にしたがって規則正しく成り立っている音節というユニットによって語が構成されていることを理解するというものである。たとえば5文字音節に10種類があるように、音節を構成する文字と文字の結びつき方の規則の数は決して少なくなく、すべてを機械的に暗記することはできない。説明にしたがって一覧表にある、ハイフンで分節されたさまざまな語を見、読み、書いてみることで、直感的、体感的にも各文字数の音節からなる語の構成を理解することができるようページが構成されていると言える。

まず音節と分節をしっかり理解させることからスペリングの学習を始めることにおいては、クランプの指導法はそれまでの多くの正書法指導書と同様である。ただしクランプは、音節を構成する文字の数によって音節の成り立ちを理解させ、そのうえでそのさまざまな組み合わせによって語が構成されることを理解させる、その際、短い音節が複数連なる長く難しい語をも同時に表に示し、どのような語もその意味での成り立ちは同じであることを理解させ、能力に応じて語彙を増やさせる。この指導法は、それまでのスペリング・ブックにおける音節数によって語を配列して学ばせるのとは異なる。多くのスペリング・ブックでは音節の数を徐々に増やして学習を進めるのに対し、クランプでは1つの音節を構成する文字の数の順に学んでゆくのである。長い語の難しさを音節数の多寡で考えるか、1音節中の文字数で考えるかの違いである。

ただし、文字数の少ない単語／音節から学んでゆく学習法自体は、当時の一般的なスペリング・ブックの構成とは別に、実際にはどの時代においてもごく一般的であったと思える。たとえば、クランプよりおよそ1世紀前のジョン・プリングリーの『ルードゥス・リテラリウス』（1612）では、まず2文字の音節から始め、徐々に3文字、4文字と文字数の多い音節を学ばせている。<sup>9</sup> また、音節数の順に学習するとしても、1音節語のリストの後の方に示される文字数の多い単語は、短い複音節語を学んだ後で追々覚えられたであろうことも想像に難くない。したがって、クランプの書の特徴は、単語全体の文字数ではなく、1音節中の文字数の少ないものから学ばせるという原則によって単語集の構成を行ったことにあると言える。それは短い単語から学ばせるというごく自然な指導法にも矛盾しないものであった。19世紀初頭のジョウゼフ・ランカスターのモニトリアル・システムによる学校のシラバスにおいても、8つのクラスのうち最下級でアルファベットを学んだ後、第2学級で2文字の単語と音節、第3学級で3文字の単語と音節、というように、クランプの指導と同じ順で進んでゆく。<sup>10</sup> 次節ではクランプの指導法の原理とも言うべきものについて考えてい。

### III

『正書法の解剖』に刊行年が比較的近く、初めて読み書きを習う子供たちが用いたと思われるスペリング・ブックの検討をしてみたい。特に、語の習得が音節数にしたがって進められるか、1音節中の文字数にしたがってかに注目したい。

第1節でも触れたエリスの『英語学校』は、末尾にリーディングの練習用に付された50ページほどの聖書の神の信託や祈禱をのぞけば、残りの

150 ページほどは 3 つの単語集からなる。初めに示されるのがきわめて明快地に 1 音節語から 6 音節語までの語を abc 順に並べた一覧表である。A では、acre, acres, act, acts から始まり、最も長い語でも apples であり、1 音節であることはすなわち短くわかりやすいものであるとの原則が認められる。ただし音節数が増えるにしたがって、おのずと難しい語が混じってくる。3 音節語のなかには *countervail*、6 音節語のなかには *evilfavouredness*, *propitiation* などのような使用頻度の低い語も見られる。2 つ目の単語集は固有名詞を音節数順に並べたもの、3 つ目は初学者向きの日常的で使用頻度の高い語を音節数に関わらず並べたものである。より発行年がクランプのものに近いコカーの『優秀な教師』もその半分ほどのページ数が 1 音節語から 8 音節語までの語表である。6 音節語には *discommendation*、8 音節語には *irreconciliation* のような抽象概念も多い。別稿でも紹介たように、これらの 2 冊の教科書にはきわめて愛らしいアイコンからなるピクチャー・ディクショナリーが付されており、初めて読み書きを学ぶ者、なかでも子供の読者を想定して編集されていることがわかる。難語が混じっていることで、幼い子供たちには学びにくいとしても、年長になるにしたがって徐々に覚えるべき単語を集めたものとなっている。これらの 2 書はいずれも多くの生徒に用いられたものであり、エリスが少なくとも 5 版、コカーが 18 版刷られている。クランプが言う「一般のスペリング・ブック」と呼ぶものの中にこれらの 2 書が含まれていると考えてもよいだろう。

一方、音節数の順にページが進んでいないスペリング・ブックもあり、さまざまな方法でスペリングの成り立ちが解説されている。クランプの書以前に、1 音節中の文字数にしたがってスペリングを解説したものとしてはトマス・ライの『子供のお楽しみ』(1671)<sup>11</sup> がある。同書では文字、母音の章の後、第 3 章の子音を伴った 2 文字の音節や単語から始め、第 6 章

の4文字音節を用いて作られる語までが章ごとに解説されている。ただし、クランプの書のような音節の文字数による単語集にはなっていない。たとえば3文字音節の章では、母音字の前に2子音字がある音節として、bla; cle; fli などがあることが示されているだけで、3文字1音節の他の組み合わせの例も、また具体的な語のリストもない。イライシャ・コールズの『完璧な英語教師』(1674)は4つの単語集からなる。第1は、脚韻による単語集、第2、3は音節数のいかんに関わらず、ハイフンで分節し、アクセント記号を付したさまざまな多音節語をアルファベット順に並べたもの。第4が音声表記とスペリングを併記したもの、たとえば e-vá-zhun | evasion; hapm | happen などのアルファベット順の一覧である。クリストファー・ターパーの『英語教師』(1687)<sup>12</sup>は、発音とスペリングの教科書である。単語のリストは文字と発音の規則を解説するそれぞれの項目中にある。たとえば tion の脚韻を持つ語のリストがアルファベット順に並べられている。

これらの先行するおもな書との対比からも、スペリング・ブックの改善を目指したクランプの意図は理解できる。クランプの指導法は、語を分節する(分析する)ことでその成り立ちを理解させるそれ以前のスペリング・ブックのものとは異なる。生徒がすべての音節の種類をユニットとして理解した上で、それらをいかに結びつけることで単語に組み立てる(統合する)か、すなわちその語を発音し、書けるかに主眼を置いているのである。

#### IV

これまで見てきたごく少ない例からもわかるように、17、18世紀にイングリッシュ・スクールやチャリティ・スクールで用いられたスペリン

グ・ブックの説明の中心は、文字と音節および分節に置かれている。それでは、音（音素、phonemes）と文字（書記素、graphemes）の対応についてはどのような指導が行われたのだろうか。たとえばクランプの書では、すでに見たように、冒頭で各文字のアルファベットの読み方は表音的に示され、さらに各章でスペリングと黙音、流音の関係には言及がある。しかし、たとえば同じ文字 g が gift と gentleman では異なった音となるといったことや、th、ch、ph などの音についての説明はない。実際には単語中の各文字、各音節を発音しながら単語の音の指導をしたと考えられる。すなわち、文字の連結を音節として認識し、それらの各音節の音を組み合わせて発音して、単語としての音とスペリングを「統合的」に認識してゆく過程がとられたであろう。

ところで、イアン・マイケルによれば、「スペリングは 18 世紀末まではしばしば、またその後 1830 年代まではときに、単に「語を分節すること」と捉えられていた」という。すでに 16 世紀末のウィリアム・ブローカーは『英語正書法改良詳論』で「語を分節化することをスペリングと呼ぶ」と書いているし、一方 19 世紀初頭のサミュエル・オリヴァーも『一般批判文法』で「単語や文字列を分節することをスペリングと呼ぶ」としている。すなわち、マイケルが指摘するように、19 世紀初頭までの文法書においては、スペリングを「分析的」なものとして捉え、語を音節に分け、それを文字に分解することであるとする考え方が一般であったのである。<sup>13</sup>

しかし、英語教育史の立場からスペリングの指導を見た場合、スペリングの学習は、まず母音を覚え、それに子音を付け足してゆくことで音節を理解し、1 音節語から始めて 2 音節語、3 音節語というように徐々に音節数の多い単語を組み立てられるようにしてゆくという「統合的」なものとして行われていたという。マイケルは、スペリングのそうしたとらえ方を最初にはっきりと表明したのはアイザック・ウォッツであるとしている。

ウォッツは『英語読み書き法』（1721）の問答形式で分節を説明する第10章で、スペリングを「読み方あるいは書き方において、文字や音節から単語を組み立てること」と定義している。それに続く「複数の音節からなる語を綴る際、文字はどのように分節されるのですか」との問いに対する答えは、次のようである。

All the letters that make up the first syllable are to be put together, and pronounced; then put the letters that make up the second syllable together, and having pronounced them, join them to the first, and thus proceed till the word is finished: As for example, in the word Philosopher.

*P, h, i,* ————— Phi  
*l, o,* ————— lo ————— Phil—lo  
*s, o,* ————— so ————— Phil—lo—so  
*p, h, e, r,* ————— pher ————— Phil-lo-so-pher.<sup>14</sup>

文字から音節へ、音節から語へと、発音しながらつなげてゆくのである。このような考え方は、スペリングを、自ら音節を組み合わせて単語を読み、発音し、綴るプロセスとして捉え、読み（書き）を「よりおもしろく楽しいもの」（献辞）にするというクランプの指導法と重なるものである。その意味で、スペリング指導の統合的なアプローチについては、わずかとは言えクランプがウォッツに先んじていたと言うこともできよう。

モニトリアル・システムで知られる18世紀末のアンドルー・ベルのマドラス校におけるスペリング学習にも同じ統合的なアプローチが生きている。分割された文字からスペリングを覚えるスペリング・オン・ブック（spelling on book,）（c-a-t, cat）という方法である。次の段階として、覚え



た単語を文字に分割してスペリングを確認する分析的なスペリング・オフ・ブック (spelling off book) (cat, c-a-t) と区別された。その後で書きとりなどを行うのである。<sup>15</sup> また「統合的」という意味では、今日の「統合的フォニックス」(synthetic phonics) を用いたリーディング指導も似たアプローチを含む。統合的フォニックスでは「文字(書記素)を音(音素)に変換し、それらの音を組み合わせて単語として認識する」ことを教えることに主眼があり、「特定の書記素に結び付く音素それぞれを切り離し、発音し、それらを結び付ける(統合する)ことで単語を読み、綴るのである。例、d/o/g。」<sup>16</sup>

前節で紹介したように、たとえばライの『子供のお楽しみ』にも、一部音節の組み合わせによって語の構成を説明するスペリング指導は見られた。しかし、クランプの書はチャリティ・スクール向けの推薦図書として挙げられ、SPCK 草創期のおそらくは複数の学校で用いられた。この指導法が初期チャリティ・スクールの読み方の教育に与えた影響の意味は一定程度あったと思われる。またウォッツも非国教徒の立場からチャリティ・スクールの教育に肩入れをしており、その読み書き教科書もそれらの学校での使用を想定して書かれたものであった。SPCK 系学校推薦図書一覧中のクランプの書がその視野に入っていたとしてもおかしくない。

## V

チャリティ・スクールの英語教育の目的は、貧しい階層の子供たちに初歩的な読み方を身につけさせることであった。教理問答書や祈祷書などを、そして最終的には聖書を自ら読み、キリスト教の教えを理解できるようにさせることが目標とされた。<sup>17</sup> そうした教育において、その出発点となる正書法、すなわちアルファベットとスペリングの指導には教師たちの

関心も高く、その有効な方法が全国の主として教師経験を持つ著者によって試され、教科書のかたちで提案された。クランプの書もそうしたものの一つである。ことに、SPCK の推薦図書であったことや、そのボリュームや価格が手頃であったことなどから、一定の読者を得て成果をあげた。

この時期のスペリングの指導に、その教育法の原理において、また実践において、ウォッツとともに注目すべきアイデアを示した教師がクランプであったと言える。クランプの提案した方法は、単語がさまざまな数の文字から成る音節から構成されていることを理解したうえで、生徒がその音節を自ら組み合わせ、統合することで、単語を読み、発音し、書き、さらに次の段階で語形や統語の基礎を学び、やがて文章を読み、書くことができるようにするというものである。彼は読み方の練習を「よりおもしろく楽しいもの」にすると述べているが、その基本には、自ら音節を結びつけて単語を構成するという生徒の能動性の尊重が認められる。それは、まず自ら音節を組み合わせることで単語を頭の中に思い描きつつ読み、発音し、次に実際に書くという行為の持つ楽しさによるものであった。彼が同書によって「教師の苦勞を（大巾に）軽減する」（献辞）というのは、読み方の練習の主体がより生徒の側に移ることを意味しているのである。

チャリティ・スクールの正書法教科書とそれを用いた指導が 18 世紀初頭の子供たちの読み書き教育の発展に一定の寄与をしたことは言うまでもない。なかでも、SPCK などによる全国的な学校創設や教科書の出版や配給の制度的な発展のなかで、自らの体験をもとに教科書を著わす教師たちのさまざまな指導の創意工夫が、学校推薦図書などとして全国の多くの教師に伝わるようになったことの意味は大きい。それによって、スペリングを学び始める生徒にふさわしい指導法がどのようなものであるかの一定の規範を教師たちが認識することとなるからである。クランプの小冊子にもそうした功績が認められるのである。

追記 本稿は平成 23 年度成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

## 注

- 1 [Thomas Crumpe], *The Anatomy of Orthography: or, A Practical Introduction to the Art of Spelling and Reading English* (London, 1712; repr. Gale Ecco Print, n. p., n. d.).
- 2 Ian Michael, *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800* (Cambridge, 1970), p. 184; 渡部昇一『英語学史』(英語学体系第 13 巻、大修館、1975)、10-12 頁、ヘルムート・グノイス『英語学史を学ぶ人のために』(世界思想社、2003)、39 頁を参照。
- 3 Henry R. Plomer, *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England, Scotland and Ireland from 1668 to 1725* (Oxford, 1922; repr. 1968), p. 106 を参照。
- 4 代表的文献書誌にも初版のみ挙げられている。R. C. Alston, *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*, corrected reprint of volumes I-X (Ilkley, 1974), IV, p. 47; Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), p. 432 を参照。
- 5 W. O. B. Allen and Edmund McClure, *Two Hundred Years: The History of the Society for Promoting Christian Knowledge, 1698-1898* (London, 1898), p. 187 所掲。
- 6 Victor E. Neuburg, *Popular Education in Eighteenth Century England* (London, 1971), p. 71.
- 7 M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1938; repr. London, 1964), pp. 56-57 を参照。
- 8 Tobias Ellis, *The English School: Containing, a Catalogue of All the Words in the Bible* (London, 1670). 鶴見が見たものは、5th edn (London, 1680; repr. Menston, 1969); Edward Cocker, *Accomplish'd School-Master: Containing Sure and Easie Directions for Spelling, Reading, and Writing English* (London, 1696; repr. Menston, 1967). 拙論「ABC と聖書——17 世紀後半のイギリスにおけるアルファベット = 綴字教育とその教材」(『成城文藝』第 206 号、2009、(1)-(10)) を見よ。
- 9 John Brinsley, *Ludus Literarius: or, The Grammar Schoole* (London, 1612; repr.

- Menston, 1968), p. 16. 同書については、拙論「ラテン語文法訳読と母語教育——ジョン・プリンズリー『ルードゥス・リテラリウス』と17世紀イギリスの英語教育」(『成城文藝』第200号、2007、(65)–(79))を見よ。
- 10 Charles Birchenough, *History of Elementary Education in England and Wales from 1800 to the Present Day* (London, 1938), p. 248 を参照。
  - 11 Thomas Lye, *The Childs Delight* (London, 1671; repr. Menston, 1968).
  - 12 Elisha Coles, *The Compleat English Schoolmaster* (London, 1674; repr. Menston, 1967); Christopher Cooper, *The English Teacher or the Discovery of the Art of Teaching and Learning the English Tongue* (London, 1687; repr. Menston, 1969).
  - 13 William Bullokar, *Booke at Large, for Amendment of Orthographie for English Speech* (London, 1580), Samuel Oliver, *A General, Critical Grammar of the Inghish Language* (London, 1825) からの引用を含め、Michael, *Teaching of English*, p. 90-91 を参照。
  - 14 Isaac Watts, 'The Art of Reading and Writing English', in *The Works of the Reverend and Learned Isaac Watts, D. D.*, compiled by the Rev. George Burder, 6 vols (London, 1810), IV, 691. Michael, *Teaching of English*, p. 91 を参照。
  - 15 Birchenough, p. 248-49 を参照。
  - 16 Andrew Lambirth, 'Reading', in *Primary English Teaching: An Introduction to Language, Literacy and Learning*, ed. by Robyn Cox (London, 2011), p. 30. Margaret Mallett, *The Primary English Encyclopedia*, 2nd edn (London, 2005), pp. 242-43 をも参照。
  - 17 拙論「『教理問答付きABC』の伝統——イギリスのチャリティー・スクールにおける英語綴字教育」(『成城イングリッシュモノグラフ』第40号、2008、265-87) および「『新約聖書が完璧に読めること』——18世紀イギリスにおける初等リーディング教育の達成目標」(『成城文藝』第207号、2009、(22)–(43))を見よ。